

アラビスト外交官の39年

第 29 回 駐リビア大使の日常と、優雅ではない大使の仕事（最終回）

2013 年 10 月 01 日

塩尻 宏

《駐リビア大使の日常》

現在、世界には日本を含めて 195 の独立国家があり、そのうち国連加盟国は 193 か国です。2013（平成 25）年 7 月現在の外務省資料によれば、日本は、135 カ国に特命全権大使が駐在し、59 か国については近隣国に駐在する特命全権大使がそれぞれの国の大使を兼務しています。つまり、日本は、北朝鮮を除く全ての国と外交関係を維持しており、特命全権大使が駐在する国の首都には日本国大使館が設置されています。日本の駐リビア大使は 135 か国に駐在する日本国特命全権大使の 1 人で、その執務場所が在リビア日本国大使館ということになります。



写真 1: ガーネム (Dr. Shukri Ghanem) 全国人民委員会書記 (首相格) との会談 (2004.8. 23、トリポリ)
(注: その後国営石油公社総裁を務めていたガーネム氏は、リビア内戦中の 2011 年 6 月にカダフィ政権から離反。ウィーンに滞在中の 2012 年 4 月に同市内のドナウ川で遺体発見、死因は不明)

どの大使館も自国と自国政府を代表して活動し、あらゆる必要な事項について駐在国政府と折衝すると同時に、自国民の保護やその活動の支援を含む国益追求のために活動しています。その国の重要度や日本との関係の緊密度の違いによって大使館の規模に大小はあっても、大使や大使館が基本的にやるべきことは同じです。大使館では旅券・査証業務のみならず出生届や婚姻・離婚届の受理などの戸籍事務まで行いますので、行政サービス機関でもあります。

人によって仕事のやり方は異なるかも知れませんが、私が駐リビア大使として勤務していた時は、他の館員と同じく昼間は大使館事務所で日常業務を行っていました。大使館と東京外務省との公式な連絡は大使と外務大臣の名前で行われることになっていますので、これらの書類の全て目を通す必要がありました。その合間に、リビア当局者との面談に出かけたり、外国の同僚大使との相互訪問、日本からの企業関係者の来訪対応などを行ったりして、事務所での勤務時間が終わります。

大使館や総領事館などの在外公館職員は原則として 24 時間勤務と理解されており、大使館職員は必要とあれば深夜でも明け方でも対応するのが当然と考えられています。全ての業務が通常の昼間の時間帯に終わるわけではありませんが、近年では、在外職員も日本の労働法規に準じた勤務（出勤）時間を遵守するようにとの実態にそぐわない注意喚起を外務省から受けています。旅券・査証など領事事務や広報文化センターなどの窓口業務は時間を守る必要がありますが、時を選ばない突発的な出来事もありますし、日本から来訪する要人はたいてい夜中のフライトで到着します。現在でも在外公館職員は、従来どおり淡々と深夜の仕事にも対応しています。

大使は毎日のごとく夕食会などの社交行事に招かれたり招いたりして優雅な生活を送っているとと言われることがあります。私がリビアに在勤していた当時の手帳を見返してみると、確かに、毎週のごとく、時には週に 2～3 回も、どこかの国のナショナルデー・レセプションに出席していました。日本も年末の天皇誕生日近くになると外交団やリビア側関係者を招いてレセプションを開催します。ナショナルデー・レセプションには、相手国に敬意を表する意味からもお互いに出席するのが大使としての務めでもあります。当時リビアには確か 60 か国ほどの大使館がありましたので、平均しても週に 1 回以上のナショナルデー・レセプションが行われていたことになります。



写真 2: 日本大使公邸での寿司パーティ(外交団に大人気でした。)

(中央は英国大使、その左はブルガリア大使、左端は筆者)。

このほか、アジア諸国や主要国（G8）などの小規模なグループや個人的に親しくなった大使との夕食懇談会、日本からの来訪者との意見交換会、在リビア日本企業代表者との情報交換会などを併せると、個人的に夕食をとることは平均して週に2～3日程度だったと記憶しています。

このほか、機会を見つけて館員や現地職員との私的な懇親会もたびたび催していました（もちろん、私の個人的な食費や私的な懇親会の経費は私の自己負担）。このような機会を持つことで、情報統制が厳しかった当時のリビアで何が起きているのかを何となく感じ取ることができました。外交団との日ごろからの親密な関係をもつことにより、個別の事象について外国大使や関係者に照会や確認することもできたと思っています。

おおよそ以上が駐リビア大使としての私の日常でした。これだけであれば、大使の仕事も大したことはなく、見方によっては優雅な生活と言えるかもしれません。しかし、このほか非日常的な出来事や用務も結構多いものです。リビア側の求めにより革命記念日行事や人民議会開会式、また、頻繁に行われていた元首クラスの要人訪問の歓迎行事などへの参加の機会も少なくありませんでした。また、毎年東京で行われる中東大使会議のために帰国していましたし、逢沢総理特使のリビア訪問（2004.6）やセイフル・イスラム（カダフィ次男）の訪日招待（2005.4）、日リビア友好協会ミッションのリビア訪問などの要人往来やリビア外務省アジア局長や若手行政官グループなどの訪日招待にも対応しました。私の在任時には、リビアが国際社会との関係正常化したことを反映して、日本からのビジネス・学術関係者の来訪者も増え、それら人々への応接の機会も増えました。



写真 3: 在リビア日本国大使館現地職員及び家族との懇親会(大使公邸)

《旅行中に発病した日本人ツアー客の顛末》

ある時、日本の旅行社が企画した辺境ツアーでサハラ砂漠を旅行中の日本人ツアー客の1人が発病したとの連絡がありました。現地関係者の報告からその容態は深刻だと判断され

ましたので、救急車を手配してトリポリに搬送し、入院してもらいました。このような場合には基本的には旅行社が対応し、日本大使館としては側面支援を行うものなのですが、同行していた添乗員（旅行社の社員）は残りの旅行者と共に帰国してしまい、ひとりで残された病人は日本大使館で面倒を見ることになりました。

その人の病状はまともな会話ができない状態でしたので、パスポートの番号や氏名に基づいて在リビア日本大使館から東京の外務省経由で家族に連絡したところ、親族がトリポリに駆けつけることになりました。それからの数週間は、入院中の病状確認、日本の家族への連絡とトリポリに駆けつけた親族の滞在支援、日本への緊急移送手配などで、私を含めて全館員が昼夜を問わず忙殺されました。

リビアでの医療環境や本人の都合をも考えて、病状が落ち着いた頃を見計らって東京に移送して日本で治療するのが適当との判断になりました。トリポリから東京への直行便はありませんので、欧州経由の航空便を手配しようとしたが、当初はどの航空会社もその病人の搭乗を敬遠し、フライトの手配が難航しました。最終的には、万一の場合に備えて医師が同行することで航空会社を説得してようやく移送の目処が立ちました。その間、本人の病状確認、付き添い親族の滞在支援、同行を依頼する医師の人選、リビア出入国手続きや航空券の手配など等に奔走したことを思い出しました。

小規模な大使館ですので、何かあれば、現地職員の協力を得つつ全館挙げて対応せざるを得ないことになります。このようなさまざまな問題が次々と起こり、気が休まる時はなかったというのが正直なところです。大使館は行政サービス機関の一つで当然のこととは言え、思い返すと、私のリビア在勤中の生活は外部から想像されるほどヒマでも優雅でもありませんでした。

《リビアのアラビア語化政策》

カダフィ時代のリビアでは徹底したアラビア語化政策が実施されていました。長年にわたり欧米諸国と緊張関係にあったリビアでは、一時は英語教育が禁止されていたこともあり、リビア当局者は公の場で英語を使うのをはばかる雰囲気がありました。第26回のコラムでも書きましたとおり、私が在勤していた当時も、街中の道路標識や看板などの全てはアラビア語表記のみでしたので、アラビア語を知らない外国人は不便を感じる国であったと思います。また、リビアへの入国査証（ビザ）を申請する際には、旅券（パスポート）に記載されている氏名・出生地・生年月日・有効期間などの基本事項のアラビア語訳を付記していなければ受け付けられませんでした。

当時からビジネス用務でリビアに出張する日本企業関係者や辺境旅行ツアーで訪問する日本人旅行者などがいました。当初、日本外務省ではアラビスト職員が行政サービスの一環

として便宜的に彼らの旅券事項のアラビア語訳を行っていました。その後、次第に件数が増えて事務的負担が大きくなったことから、ある時期から外務省では旅券の空欄に項目名のみのアラビア語スタンプを押印するだけに留めて、それぞれの内容は各自で記入する方式としました。日本人出張者や旅行者はアラビア語が書ける人を探して記入作業を依頼せざるを得なくなりました。

私が外務省を退職して中東調査会の手伝いを始めてから、友人・知人のツテや紹介によって、中東調査会や私個人あてに旅券事項のアラビア語付記についての依頼が来るようになりました。私としても日本とリビアの関係を維持するために少しでも役立つのであればと考えて、可能な限り対応していました。2006年から2010年にかけての頃は、リビアに対する国際的な関心が著しく高まっていた時期でしたので、リビアの査証を申請する日本人の数も急速に増えました。

そこで、中東調査会では2007年11月から会員企業関係者や個人会員に対するサービス業務の一環として、旅券事項アラビア語付記の要望には従来どおり無償で対応する体制を整えました。ちなみに、中東調査会が対応したアラビア語付記の件数は、2007年度29件、2008年度102件、2009年度43件、2010年度19件、2011年度9件、2012年度12件でした。リビアは2011年初めに旅券事項のアラビア語付記の条件は撤廃したと伝えられました。しかし、その後も実際に入国する際に英語を知らないリビア人審査官からアラビア語の付記がないことを指摘されてトラブルになった例があるようで、中東調査会の会員に対する旅券事項アラビア語付記の依頼は現在も続いています(2013年度4月から9月まで3件)。

また、言語形態の違いから日本人氏名のアラビア語表記が不統一なために混乱が見られたので、私が当時の在京リビア大使と非公式に協議して表記方法を整理したことも懐かしく思い出します。

《全ての公文書はアラビア語で》

上述の状況からも想像できると思いますが、私が現地に在勤していた当時、リビア当局との公文書のやり取りはアラビア語のみでした。そのため、全ての公文書は英語で起案して現地職員がアラビア語案を作成し、最終的に私が確認して発出していました。その反対に、リビア側からの文書はまずは現地職員がアラビア語から英語に翻訳し、それにアラビア語原本を付して回覧していました。このように書けば、館内の事務処理は結構機能的に行われていたように聞こえるかもしれませんが、信頼できるレベルでアラビア語／英語の翻訳作業ができる現地職員は1人だけでしたので、全ての業務は彼の双肩にかかっていました。今でも敬意と感謝の念を持って彼の奮闘ぶりを思い出します。

その現地職員は大学卒で人格・識見ともに優秀な人物でしたが、そのアラビア語能力はアラブの知識人としての一般的なレベルでした。アラビア語は日常の話し言葉と文章語は明確に異なります。私たち日本人も母国語としての日常生活上の日本語能力はあっても、特に文章語については必ずしも正確な日本語を使えるとは限りません。そのため、公文書で使う文法や語彙について彼とたびたび議論しました。馴染みが薄くて言語形態が全く異なる日本語とアラビア語で双方の考えをできるだけ正確に伝えようとしたその時の議論は、私にとって極めて貴重で有益な経験となりました。

リビアに駐在する欧米・アジア・アフリカ諸国の同僚大使のうちアラビストの大使は英、米（臨時代理大使）、ブルガリア、中国など限られており、アラビア語ができる外交官スタッフや英語ができる現地職員に頼って仕事をしていました。外国元首の来訪時に各国大使は空港での出迎えに動員されていましたが、現地職員だけに頼っている場合には、リビア側から勤務時間外に連絡があった時には対応できないこともあったようです。あるアフリカの大使は自国の大統領が急遽リビアを訪問したのを CNN のニュースで見て、驚いて空港に駆け付けたという信じられないこともあったと聞きました。

《朝鮮語の専門家を駐リビア大使に？》

リビアに着任して2年半が経った2005年12月下旬、ベンガジ出張中の私に東京外務省の官房長から「あなたは来年の2月に帰朝発令の予定です」との電話連絡があり、その後1週間ほどして電報で正式な内示がありました。現地に駐在する各国大使とも親しくなり、リビア人の友人や知人もできて、リビア事情が分かりかけた頃に離任するのは、残念な感じもしましたが、人事の都合とのことで受け入れざるを得ませんでした。しかし、私の後任が中東やアラブ世界に全く縁のない朝鮮語の専門家と聞かされて意外に思いました。

前述のとおり、長年にわたり欧米諸国と緊張関係にあったリビアでは、一時は英語教育が禁止されていたこともありました。私が在勤していた当時は、リビア当局との公文書のやり取りは全てアラビア語のみでした。次席の参事官は英語の専門（その後任はフランス語の専門）で、私以外にアラビア語ができるのは研修を終えて間もない若手館員が1人だけでした。後任者の苦労が懸念されましたが、ほどなく次席に優秀なアラビストが赴任したと聞き、少し安堵しました。

外務省の人事、特に総領事や大使などの公館長人事は、中東の最重要国の一つであるサウジアラビアの大使にロシア語のキャリア職員が就任するなどの例を見れば、専門性より処遇の配慮が優先されているようです。そう考えれば、朝鮮語の専門家がアラビア語しか通じないリビアの大使になることは不思議ではありません。大所高所からの判断が求められる大使や総領事には、必ずしもアラビア語に通じてなくても優秀な人物を配置する必要があるとの考え方も理解できます。他方、そうだとすると、アラブ世界に最も縁遠いロシア語や

朝鮮語の専門家をサウジアラビアやリビアに大使として派遣せざるを得ないほど、日本の外務省には優秀な人材が払底しているとも思えません。人事の都合とは言え、私にはその真意が計りかねました。

駐サウジアラビア大使は現在もロシア語のキャリア職員が務めています。個人的には以前から交流があり、尊敬できる優秀な人物ですが、それだけに異文化社会での任務の苦勞がしのべれます。駐リビア大使については、朝鮮語の専門家のあと英語のキャリア職員が続き、現在はアラビストが就任しています。彼の活躍を期待したいものです。

《駐リビア大使を最後に退官》

私は2006年2月10日に帰朝を命じられて、3月19日にトリポリを出発して帰国しました。帰朝発令から帰国までの間40日近くありましたが、当時の手帳をひも解いて見ると通常の外交用務に加えてリビア在勤中にお世話になった各国大使への挨拶まわり、懇意にしていた大使からの送別ディナー招待への出席、引越し荷物の手配、私が主催する離任レセプションの開催などで、瞬く間に出発の当日になったことを思い出します。

トリポリからの帰国の途次、乗り継ぎのためにドバイに立ち寄って、在ドバイ総領事館の同僚や現地職員と旧交を温めました。同時に、旧知のアフマド殿下 (H. H. Sheikh Ahmad bin Saeed : エミレーツ航空会長 : このコラムの[第24回](#)ご参照) にも表敬訪問して歓談し、旧交を温められたのは幸いでした。

2006年3月21日に帰国して国内の関係者に挨拶し、1カ月後の4月21日に、当時の麻生外務大臣から「願いにより本官を免ずる」と書かれた辞令を受け取って、最終的に役人人生を終えました。その後、いずれも非常勤のボランティア（無報酬）で（財）中東調査会役員や日本リビア友好協会顧問などを依頼されて現在に至っています。

2011年春には、チュニジアから始まったアラブ世界での民衆蜂起の波にのまれてリビアでも内乱が起き、同年10月にはカダフィ政権が崩壊しました。リビア情勢の思いがけない展開に、一時は日本のテレビや新聞などもリビア内戦の動向やカダフィの動静を連日報道しました。欧米のマスコミの報道ぶりを反映して、日本でも普段は馴染みもなく関心もなかったリビアで何が起きているのかに世間の注目が集まり、頻繁にテレビの報道番組や新聞紙上で解説やコメントを求められたりしました。

この原稿を書いている昨今は、エジプトやシリアの情勢に世間の注目が集まっています。リビアでは、その後も新生リビアの国造りに向けて試行錯誤が続いていますが、もはやその動向についてのマスコミ報道は全くと言って良いほど見当たりません。マスコミとしても

世界中の動きを全て事細かに伝えることはできませんが、マスコミの報道がないからと言ってリビアで何事も起きていないかのように感じるのは、ある種の錯覚でしかありません。

《終わりに》

このコラムは今回でひとまず終わりにします。拙文を最終回までお読み頂いたことに感謝します。私の勝手な都合で時おり原稿が滞ることがありましたこととお詫びします。このような機会を与えて頂き、また、適切なご示唆を頂いた Asahi 中東マガジン編集人の川上泰徳氏（現朝日新聞中東アフリカ総局長）に感謝と敬意を表します。

外務省に在職した 39 年間には様々な人々と出会い、様々な出来事に遭遇しました。このコラムに書かせて頂いたことは、それらの体験や見聞のほんの一部でしかありません。昔の記憶をたどりながら印象的な事柄をテーマにして書きましたが、古くは 45 年も以前の事です。どうも、私は自分にとって都合の良いことを都合の良いようにしか覚えていないように感じられました。人間の記憶とはそのようなものかもしれないと、これまた、都合よく自分に言い聞かせています。

（終わり）

（このシリーズは 2012 年 8 月から 2013 年 10 月まで当時の「Asahi 中東マガジン」に掲載されたコラムの原稿を関係者の了解を得て再録したものです。長らく駄文をお読みいただき、ありがとうございました。）

塩尻 宏（しおじり ひろし） 公益財団法人 中東調査会 参与

1941 年大阪府生まれ。大阪外国語大学アラビア語学科卒。2012 年から現職。1967 年外務省入省。新独立国家室長、在ドバイ総領事、駐リビア特命全権 大使などを務め、2006 年退官。その後、2012 年まで財団法人 中東調査会常任理事。2012 年から 2014 年まで公益財団法人 中東調査会 業務執行理事・副理事長。2014 年から現職